

### (1) 事業名称等

【事業名称】 高畑AIR歴史資源活用モデル事業

【実施団体】 一般社団法人高畑トラスト

【事業経費】 1,000,000円

### (2) 事業の目的

高畑地区の歴史資源を活用したAIR導入の有効性・実現性の検証を目的とする。鎌倉～明治初期にかけて春日大社神職の屋敷地が広がっていた歴史地区に唯一残された18世紀の社家建築「藤間家住宅の保全」と「改修後の文化的活用」を実現させるためには、改修費用の確保と、自立可能な収益性のある活用案を持つことが不可欠である。2018年11月に藤間家住宅が登録有形文化財に答申され、改修工事も始まり、活用をスタートさせる環境が整ってきた。本事業で行うのは、藤間家でのAIR導入に必要な要件の調査であり、高畑地区を中心にしたネットワークの在り方を探ることである。先行して歴史建築を活用している事例で、障壁や課題を明らかにし、どのようなモデルがあり得るのかを検証する。藤間家の選択が高畑地区全体に波及し、豊かな歴史資源を基盤にした、過去・現在・未来の交差する新しい文化地区モデルとして発展させることを目指す。

### (3) 事業活動の内容

#### ・調査活動（通年）

実施者： 佐久間 信悟、 佐久間 公美子、 伊藤 裕久、 西山 要一、 村上 峻

- a) 聞き取り調査
- b) AIR資料・実地調査
- c) 建築、文書類および景観調査

#### 目的・内容：

a)では、周辺住民と施設を中心に個別に聞き取りを行い、現在の状況と課題を明らかにし、高畑地区での事業展開に必要なネットワークの在り方を検証する。

b)では、AIRに関する国内外の調査資料を調査するとともに、AIR関連の国際会議を取り上げ有効な事業モデルを検証する。

c)では、3名の執筆者による調査資料から、歴史建築と地域を最大限に活かす事業モデルを検証する。

#### ・第1回トークセッション

タイトル： 高畑歴史資源を活かすAIR

登壇者： 佐久間 信悟、 大久保 泰佑（一般社団法人ノオト）

日時： 平成30年9月28日（金） 13:30～15:30

場所： ならまちセンター 会議室3・4 （奈良市東寺林町38）

参加者数： 21名

目的・内容：

藤間家住宅と高畑地区を中心に行うAIRという文化事業の内容を参加者と共有し、地域内ネットワークのイメージを提示した。また、兵庫県篠山を中心に全国で地域振興事業に携わる一般社団法人ノオトの大久保氏に、AIRを行う上での事業性の観点をご提言頂いた。参加者は、行政、学芸員、社寺、建築、宿泊事業、アーティスト、報道関係など、異なる属性の方々が集まった。

・講演会

タイトル：

高畑AIRの可能性への期待 世界を魅了する日本の木版画の歴史 ―水性木版画AIRの紹介―

講演者： 一般社団法人産業人文学研究所 代表理事 佐藤 靖之

日時： 平成31年1月27日（日）14：00 ～15：30

場所： 大和文華館 文華ホール （奈良市学園南1-11-6）

定員： 38名

目的・内容：

水性木版画を通じ長年AIR事業に取り組み、2020年には奈良春日野国際フォーラムで第4回国際木版画会議を予定されている産業人文学研究所の佐藤靖之氏を迎え、世界を魅了する日本の水性木版画の活況と、奈良とAIRの親和性についてご講演いただいた。

・第2回トークセッション

タイトル： 文化・歴史資源を活かしたAIRの可能性

登壇者： 佐久間 信悟、 大久保 泰祐（一般社団法人ノオト）

日時： 平成31年3月1日（金）10：00 ～11：30

場所： ならまちセンター1F COTO COTO （奈良市東寺林町38）

定員： 15名

目的・内容：

高畑地区で既に文化事業に取り組む事業者、奈良県芸術家村担当者、近隣文化施設担当者など関係者を中心に意見交換を行い、藤間家を中心に高畑でAIR事業を始めるにあたり、地域が連携していくために必要な条件と、相乗効果の発掘、またその課題を検証する。

さらに、AIRの事業性という観点で、現在までの調査で見えた問題点と解決策を提示・検証する。

#### （4）事業の成果

当地区周辺に AIR 事業は現時点で存在しない。そこで歴史資源を活用し既に事業を立ち上げている個人もしくは法人に課題について聞き取り調査を行い、主要な意見を例示する。

- ① 財政面の課題： 最大の課題は初期費用の負担である。  
個人事業者が新事業を立ち上げるときに、最も大きな障壁である。  
文化事業で収益を上げられているケースはとても少ない。
- ② 人材面の課題： 事業が軌道に乗るまでは、初期費用の節約から家族経営になっている。  
地域振興のための取り組みであっても、他機関と連携が難しい状況もある。  
そのような場合、人材確保が難しい。
- ③ 制度面の課題： 末端行政に柔軟性を望みたい。各案件固有の背景を考慮せず、既定のルールしか適用されないなら、民間の歴史的建造物は維持が難しい。  
末端行政と住人の間に独立した専門性を持つ機関が必要である。

AIR 資料・実地調査を基にした検証要約：

事業として成功例の多い西欧型 AIR の事例では、滞在するアーティストのキャリアアップに重点が置かれている。Artnet' News や国際会議 (ResArtis Meeting Kyoto 2019) によると、アーティストたちが重視するのは、スタジオの完備、切磋琢磨できる共同体の提供だけでなく、ネットワークの構築とキャリアの強化であり、そのためにキュレーターや画商とつながりを持つレジデンスに高い評価を与え彼らに勧めている。

日本のレジデンス事業では地域への還元や国際交流をベースに置くところが多い。

歴史資源の利活用に関しても国内外で相違点がみられる。東海学院大学紀要 8 (2014) 掲載の「アーティスト・イン・レジデンスを通じたアートと地域の関わり」廣瀬敏史氏の調査によると、ドイツでは、レジデンス全体の 60% が歴史的建造物を活用しているが、日本では、金沢の CAAK (金沢町屋) などごく 1 部である。

建築、文書類および景観資料からの検証要約：

希少と言われるような建造物でも、公開して見せるだけでは自走はできない。

優れた企画を打ち出し、人を惹きつけるためには活用に向けた建造物の使い方にある程度の自由度が必要である。優れた活用案と、建造物や景観維持の現行制度を、更に融和させうる仕組みがあれば、それが個性となり魅力的な空間を提供でき初めて人々が集う場となる。

第 1 回、第 2 回トークセッション：

高畑周辺エリアを中心に、多様な属性を持つ文化事業に関心のある参加者が集まり、AIR という事業を知らない者がほとんどであるにも関わらず、「高畑の歴史建築と周辺地区で行う文化事業」への関心の高さが目立った。

第1回では、AIRという事業そのものに対する導入的な知識を共有し、高畑での事業化に必要な要件を検証できた。

第2回では、地域連携の事例と課題点の共有、事業の相乗効果発掘、AIRの事業性の検証を行う予定である。

講演会：

日本独自の「水性木版画」を使ったワークショップを行うAIR事業者の佐藤氏の成功例を参考に、高畑地域内でも歴史・文化資源を使ったワークショップが機能するという知見を得た。

「百万塔陀羅尼」や「墨」「和紙」「絵筆」といった奈良でAIRに応用しうる素材を発見した。奈良市高畑において、「水性木版画」に代わるテーマ、提供プログラムについては、通年の調査およびトークセッションでも検証した。

#### (5) 事業実施後の課題

高畑地区は1つにまとまった地区モデルがあるのではなく、住人の層や気質によりおおよそ4つに分類される。その地域にネットワークを作るなら、ゆるやかなつながりが相応しいのではないだろうか。地域住人から支持される事業展開を行うにあたって、今までにない新しい共生の方法があるかどうか、各地の成功例や失敗例から読み解くことも必要である。

#### (6) 今後の展開

高畑におけるAIR事業の中心となる藤間家住宅では、現在、表正面の4部屋の改修が終了間近になり、来年度のさらなる改修も予定している。復興ギャラリーとしての機能が強化され、展示場所・スタジオとしての活用が可能になると見込んでいる。来年度には、周辺施設と連携し、今年度の調査・検証により明らかになった課題点を解消し得るトライアルとなるAIRプログラムを実施する予定である。また、2020年に奈良で開催を予定している第4回国際水性木版画会議に協調し、高畑AIR独自のプログラムを海外からの参加者に発信していくことを目指す。

文化・歴史・芸術の高畑というブランドイメージを高め、地域社会への還元へとつなげたい。

#### (7) その他

現在、海外から著名な芸術家や批評家を招聘したく、支援制度に応募している。

2019年秋には、マイケル・カラペティアン氏によるAIRトライアル企画としてパリの歴史建築「メゾン・デュ・ヴェール」の写真展と、講演会の実現を目指すとともに、同氏のやどかり理論の応用で魅力的な空間を藤間家住宅に創出したい。

また、活用スタートアップ時の支援を公的に得ることが難しいなら、ファンドを利用できるシステムが公平な機関で構築されることを要望する。